

40 . あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。

また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。

-0 decomenoi uimaj eme. decetai(  
kai. o`eme. decomenoi decetai ton aposteilanta, meÅ

41 . 預言者を預言者だということで受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。

また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます。

o`deconenoi profhtn eij onoma profhtou misqon profhtou lhmyetai(  
deconai pt.pr. misqoj fu.  
(1) *receive, accept* (AC 3.21); 歓迎する、もてなす *pay, wages;* 労働賃金、行いへの報い、  
as showing hospitality *welcome, entertain* (LU 16.4); 神への服従の報い  
(2) as assenting to God's message みことばへの同意 神への不服従の報い さばき  
*receive, accept, believe* (MT 11.14);  
(3) as taking someth. into one's hand, *take, grasp* (EP 6.17); 握る  
(4) as taking a favorable attitude toward someth. *take well to, approve, accept* (MT 11.14; 1C 2.14) 好意的に受け取る、認める

kai. o`deconenoi dikaiou eij onoma dikaiou misqon dikaiou lhmyetaiÅ

42 . わたしの弟子だということで、

この小さい者たちのひとりに、

水一杯でも飲ませるなら、

まことに、あなたがたに告げます。

その人は決して報いに漏れることはありません。」

kai. oj ah potish eha twh mikrwh toutwn pothrion yucrou/ monon eij onoma maqhtou(  
aor.水を飲ませる cup 水

anhn legw uimh(

ouvnh. apolesh ton misqon autouÅ

apol luni aor.3.sg  
(1) act. *ruin, destroy;*  
(a) of pers. *destroy, kill, bring to ruin* (MT 2.13);  
(b) w. an impers. obj. *destroy, bring to nothing* (1C 1.19);  
(c) of a reward *lose, be deprived of* (MT 10.42);  
(2) mid. *be ruined, destroyed;*  
(a) of pers. *die, perish, lose one's life* (MT 8.25);  
(b) of things *be lost, be ruined* (MT 9.17);  
(c) of transitory things *pass away, cease to exist, perish* (1P 1.7).

## 説教

マタイの福音書の10章は、イエスさまが弟子たちを宣教に遣わされる際の心構えを言われたみことばです。

「天の御国が近づいた。」と宣教しながら、

病気を治してあげたり悪霊を追い出してあげたり人々の祝福のために仕えるよう命じられます。

その際には迫害を受け、時には孤立無援化して死に至ることさえあることを覚悟するよう警告されますが、

しかし同時に、その際には

「二羽一アサリオンで売られる雀一羽でさえ、

あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはない」と励ましをいただきます。

そして、迫害ばかりでなく、迫害の最中にも弟子たちを受け入れてくれる者があることをお教えになるのです。

**40．あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。**

**また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。**

**41．預言者を預言者だというので受け入れる者は、預言者の受ける報いを受けます。**

**また、義人を義人だということで受け入れる者は、義人の受ける報いを受けます。**

「受け入れる」と訳される言葉は

「歓迎する、もてなす、同意する、好意的に受け取る、認める」という意味です。

つまり、弟子たちを、神さまから遣わされた者として認め、

その語るメッセージに同意し、好意的に受け止めて、心から歓迎するということです。

弟子たちは、イエスさまから遣わされて、神のことばを語り、神の働きをします。

それを見て、弟子たちの働きを認め、その語ることばに同意し、それを好意的に受け止めて、心から歓迎します。

そのような人は「報い」を受けるのだと言うのです。

弟子たちを神から遣わされた「預言者」と思って受け入れる者は「預言者」の報いを受け、

弟子たちを正しい「義人」だと思って受け入れる者はその「義人」の報いを受けると言うのです。

「報い」と訳される言葉は

「労働賃金、報酬、行いへの報い、神への服従の報い、神への不服従の報い、さばき」を意味します。

「預言者」が預言の奉仕をすることで神さまからいただく「報酬、賃金」、

「義人」が正しく生きることで神さまから受ける「報酬、賃金」を、

弟子たちを快く歓迎して受け入れた人たちまでもがそれに与ると言うのです。

最後にイエスさまは言われます。

**42．わたしの弟子だというので、**

**この小さい者たちのひとりに、**

**水一杯でも飲ませるなら、**

**まことに、あなたがたに告げます。**

**その人は決して報いに漏れることはありません。」**

何とイエスさまの弟子だということ

たとえ水一杯でもくれる者があるなら、その人は決して報いに漏れることはないと言うのです。

「漏れない」の直訳は「滅ぼす、破壊する、殺す、無にする、失う、奪われる」で、

イエスさまの弟子に水一杯でも振る舞う者への報酬を神さまが奪い取ったり減ぼしたりなさることがないことを意味します。それを打ち消す「決して～ない」という表現は二重の否定形が使われ、「決してどんなことがあっても報いに漏れない」という具合に「報いに漏れることがない」のだという事実が、二重に強調されています。

以上をまとめるとこうなります。

イエスさまの弟子たちが

「天の御国が近づいた。」とこの世で宣教する際、

多くの場合迫害を覚悟しなければなりません、

しかし、中には、

イエスさまの弟子だからとか、

神から遣わされた預言者だからとか、

あるいはただ単に正しい義人だからということで受け入れて歓迎してくれる者もいます。

そのような場合には、たとえ水一杯振る舞ってくれた場合にも必ず神さまがその報酬を与えてくださいます。

だから、自信を持って、安心して宣教しなさい、というのがここでイエスさまが弟子たちに伝えておられる内容なのです。

これは弟子たちにとっては励まされるみことばです。

その昔神さまはアブラハムに「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」と約束なさった後に

「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。」(創世記 12:3)と確約なさいました。

同じように、

イエスさまの弟子を

「義人」だからと受け入れる者は「義人」の報いを受け、

「預言者」だからと受け入れる者は「預言者」の報いを受けます。

たとえ水一杯でも振る舞って歓迎する者はその報いに断じて漏れることがないのです。

ところで、

ここでイエスさまが言われる「報い」とは具体的には何を意味するのでしょうか。

「預言者の受ける報い」とか「義人の受ける報い」とは何でしょうか。

その最も基本的な意味は、何より「永遠のいのち」のことになるでしょう。

そして、この地上での何某かの「報酬」ということになるのでしょうか。

イエスさまは別のところで弟子たちにこうも教えられました。

「イエスは言われた。

『まことに、あなたがたに告げます。

わたしのために、また福音のために、

家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。

今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。』」(マルコ 10:29-

このイエスさまのみことばによると、  
イエスさまのために金貨一枚を捧げる者は、  
イエスさまがその人に死んでからは永遠のいのちを与え、  
のみならず、生きている間には金貨百枚を「犠牲の代価」「報酬」として与えてくれるということになります。  
コップ一杯の水を振る舞う場合も  
やはり死んでからは永遠のいのちを、  
そして、生きている間にもコップ百杯の水を報いてくださることになります。

しかし、イエスさまは果たして本当にそんなことを言っておられるのでしょうか。

水一杯にそんな報酬に対する価値があるというのでしょうか。

否、たとえ金の延べ棒一千本を貧しい者たちに気前よく振る舞ったとしても、  
それが何か神さまから「報い」をいただくほどの「功績」となるのでしょうか。

そもそも、彼の振る舞った「水」や金の延べ棒は神さまからいただいたものではなかったでしょうか。

ヨブに向かって神さまはこう言われました。

「だれがわたしにささげたのか、  
わたしが報いなければならないほどに。  
天の下にあるものはみな、わたしのものだ。」(ヨブ 41:11)

ですから、私たちが人に施していい気になっているものも、実は元はと言えば神さまが下さったものです。  
あるいは、私たちが神さまのために捧げて得意気になっているものも、同じように元はと言えば神さまから戴いた物です。

それでは、いったい、「報い」とは何なのでしょう。

ここでイエスさまが言われた、良い行いに対する「報酬」「報い」とは、いったい何を意味するのでしょうか。

**それは、実は、ただ神さまの恵みと慈しみによって「与えられる」ものに過ぎません。**

少なくとも「永遠のいのち」に関してはそうです。

「永遠のいのち」というものは、  
私たちが生まれる前から、すなわち私たちが良い行いをする以前から、  
神さまの自由な選びの恵みに基づいて、ただひたすら神さまの恵みによって救われて、与えられたものです。

そして、そのことは「水」や「財産」の場合も同じです。

「水」や「財産」を振る舞うことも、それは実を言えば神さまのものに他ならず  
恵みによって与えられたものなのですが、  
私たちがそれを振る舞う時に、  
神さまはそれがあたかも私たちが自分の所有する財産の中から施したかのように見なしてくださるのです。

それはあたかも自分の子どもが親に誕生日のプレゼントを買ってくれるのと同じです。  
そのプレゼントを買うお金は元々親が子どもにあげたものなのですが、  
心ある親なら子どもがくれるプレゼントを心から喜び、  
それがあたかも全く子ども自身の功績であるかのように子どもに感謝し、子どもを褒めて、励ますことでしょう。  
そして、それが、相手を蔑むことなく、尊重し、敬愛する道ではないでしょうか。  
それを、子どもがくれた誕生日プレゼントを、  
「フン、これはどうせ俺がお前にあげた小遣いから買った物なんだろう。」と、  
ありがとうも言わず、喜びもせずに、  
せっかくだと子どもがくれたプレゼントを下に投げつけて、踏みつぶすとしたら、  
そのような親は、子どもを全くバカにした、子どもの尊厳と人格を踏みにじる悪い親としか言いようがありません。  
子どもを健全に成長させようという考えがないのです。

どんなに安い物でも、子どもがくれたんじゃないですか。  
自分のなけなしの小遣いの中から。  
別にあげなくてもいいのに、精一杯の自分なりの愛を込めて、親にあげたんです。

それを「フン！」と鼻であしらうこともできるけれども、  
でも、神さまは、  
そのような私たちの思い、神さまへの愛、神さまのために行う善きわざを、  
鼻であしらうことなく、足蹴にすることもなく、それを心から尊重し、敬愛を示し、  
私たちを通してなされる神さまご自身の善きわざを、私たちに帰し、  
それがあたかも私たち自身の善き行いであるかの如くに報いられるのです。

私たち自身の行いばかりでなく、私たちの存在といのちすべては、実は神さまのものです。  
それなのに、  
私たちが良いことをしたことを  
神さまは私たちの「功績」と呼んでくださり、さらにそれに「報い」てくださるのです。

このように、聖書の言う「報い」とは、実は、神さまの自由な贈り物について用いられるのです。

これは、私たち教会に仕える奉仕者にも言えることです。  
私たちは、何か、自分が善い行いをを行ったその代価としてその「賃金報酬」を受けるという習慣に慣れてしまっています。  
この世の習わしがそうだからです。  
でも、聖書によれば、そうではありません。  
なぜなら、すべてが神さまの恵みであるからです。  
私たちが「報酬」と思っているものも、実はそうではありません。  
神さまの恵みなのです。  
「善きわざ」も恵み、それに対する「報い」も恵みです。

実は、「報い」と訳される「**nisqoj**」という言葉は、調べてみると新約聖書に余り出てきません。特に福音書にはほとんど出てきません。出てきても、さばきの意味で使われていたりしています。そういう思想が無いのです。すべてが神さまの恵みであるからです。

16世紀宗教改革者ツヴィングリはこの聖書箇所「報い」を次のように解説しました。

「信仰を持つ人間は、確かに行いによって功績を勝ち取ることはないとしても、善行を止めはしない。かえって、信仰が深ければ深いほど、より大きな行いをするのである。

...信仰とは何という大きな神の賜物であるか、...

聖霊による靈感である信仰が、どうして何もせず無為であって良いはずがあるであろうか。火のある所には暖かさもあるように、真の信仰のある所には行いもまた存するのである。

反対に、信仰のないところでは、

なされる行いすらも、もはや神に喜ばれる行いではなく、善行の愚かしい模倣に過ぎないこととなる。

それ故に、

私たちの善き行いに対して厚顔にも報いを要求し、

行いが報いられない時にはそれを理由にして神のわざをなすことを止めるような徒輩は、奴隷根性の持ち主である。

報酬を目当てにして働くのは、奴隷か怠け者だけだからである。

反対に、信仰の中に立っている者は、家付きの息子のように、神のわざを勤勉になす。

彼が受け継ぐべき財産は彼が自分の労働によって獲得したものではなく、彼が勞し働くのは跡取りとなるためでもない。

そうではなくて、彼は生まれながらに、その生まれから嗣子（相続人）なのである。

功績によって父の財産を受け継ぐのではない。

たとえ彼がたゆまず務め勞するとしても、彼は報酬を願っているのではない。

なぜなら、彼はすべてのものが、いずれは自分のものとなることを知っているからである。」

イエスさまを信じる私たちは、特別に神さまに愛されて選ばれた者です。

神の子です。

やがて永遠のいのちをいただいて永遠の御国を相続するのです。

だから、そういう希望を持って、喜びと感謝をもって、「善きわざ」に励むのです。

何かそれ以下の卑しい報酬を求めて奉仕するものではありません。

この世の人々並みに「御利益」や「報酬」を求めて奉仕するのは、ツヴィングリ流に言うと「奴隷根性の持ち主」です。

この世の人々が懸命に「報酬」を求めて奉仕しているのは、彼らが天国に行けないからです。

天国という、究極の、永遠の相続を持たないからです。

神の愛がわからないからです。

神の子ではないからです。

「奴隷」だからです。

だから、焦っているのです。

少しでも「御利益」や「報酬」を得ようと焦って、懸命に、頑張って、奉仕しているのです。

でも、私たち神の子はそうではありません。

神の子は、

「報酬」をもらうために奉仕するのではなくて、

やがて必ず「報酬」がもらえるから、

すでに「報酬」をもらうことが決まっているから、だから、希望にあふれ、喜びと感謝を持って奉仕するのです。

ここに集われた、イエスキリストを信じる兄弟姉妹は、

天国に行けない「奴隷」のように、「報酬」を求める浅ましい心で奉仕するのではなく、

天国に行くことができるという「報酬」をもらうことが決まっているのだという、

希望と喜びと感謝をもって神と人に仕えて神の栄光をあらゆる生涯を歩まれるよう、主の御名により祈ります。